

英語学習活動分析
－英語指導技術としてのゲスワーク活動の有効性－

松 本 泰 憲

An Analysis of an English Learning Activity
- Effectiveness of the Guess Work as an English Teaching Technique -

MATSUMOTO, Yasunori

The purpose of this paper is to show that the "guess work" used as a learning activity in an English classroom is effective from the viewpoint of second language acquisition. A videotaped English class in a junior high school was used in transcribing and analyzing the activity. The guess work is a language learning activity which is widely used in junior high schools. Teachers imagine a word (e.g. a dog, an apple, a nose) beforehand and ask students what it is. Students guess the word, producing interrogative sentences like "Is it a dog?", "Is it an orange?" and so on.

The effectiveness of this activity is supported from the two points.

First, language acquisition is facilitated through negotiation of meaning, according to the interaction hypothesis. When students don't know what to say because of the lack of knowledge of the target language, they can get over the lack with the help of negotiation of meaning. For example, they may ask the interlocutor "What is the meaning of the last word?". This negotiation continues until they understand the interlocutor's utterance completely. This process leads to language acquisition.

Second, according to the output hypothesis, students are required to utter grammatically correct sentences. If they utter wrong sentences, the errors are corrected by teachers and they are encouraged to produce the correct form again. This process also leads to language acquisition.

The point that students are encouraged to ask questions spontaneously is particularly important, because the opportunities to use the target language spontaneously in Japan where English is learned as a foreign language are limited. To make this activity more challenging for students, teachers need to encourage the students to use the formulaic expressions like "What color is it?", "Is it big or small?" and so on. Thus, the students know the varieties of questions and more advanced language acquisition will be expected.

1. 目的

本論文の目的は、中学生を対象とした英語授業の一活動の中でインタラクション¹⁾がどのように行われているのかを記述・分析し、この活動がいかなる点で有効なのかを第二言語習得研究の観点から検証することである。また、さらに言語習得が促進されるには、この活動に何を加味すべきなのかについても検討する。

2. 分析資料の説明

本論文では、1986年に財団法人語学教育研究所の全国大会で公開された英語授業を分析の対象とした。授業者は、当時教歴30年以上の教員で、生徒は東京都内の区立中学校の2年生である。授業の手順は大きく分けて次の7つに分けられる。

1. ビンゴゲームによるウォームアップ
2. ゲスワーク

3. スキット²⁾
4. 既習単語の発音練習
5. 教科書既習課の音読
6. オーラル・イントロダクション (口頭導入)
7. 新しい課の音読

本論文では、この中の「2. ゲスワーク (guess work)」を分析の対象とする。

3. ゲスワークの活動内容と目的

学習活動の分析を行う前に、ゲスワークとはどのような活動なのか、どのような目的があるのかを記しておきたい。

ゲスワークとは、教師が生徒に答えさせたい単語を予め決めておき、それが何であるかを生徒に推測させ、生徒の側から質問を發し、教師との問答を行う中でその単語を当てさせる活動である。長 (1997: 110) には以下の実践例が掲載されている (C はクラス全体の、S は生徒一人の、T は教師の發話であることを表している)。

T: Now we'll play a word guessing game today. Are you ready? This is a part of the body. This word begins with 'f'. It has shoes or socks on it. What is it? Anyone?

S: Foot.

T: Right. (footと書いたカードを生徒に見せる) Everyone, repeat after me. Foot.

Class: Foot.

T: This is a part of the face. This word begins with 'e'. We can see many things with it. What was it? Anyone?

S: Eye.

T: You are right. (eye と書いたカードを生徒に見せる) Everyone,
repeat after me. Eye.

Class: Eye.

同著 (108) には「ゲスワークを授業に取り入れる目的」として、以下の3つがあるとしている。

- (1) 楽しく全員参加の授業をめざすのに役立つ
- (2) ウォームアップとして短時間で取り組める
- (3) 語彙・文・文型の定着に役立つ

また、同著 (110) には、活動の目的について、「英語の音声を聞いて、意味を理解し、そのものの名称を推測する活動を模索する。英語を英語を通して理解することに重点を置く」と記されている。ウォームアップの活動として捉えられながらも、中学生を対象とした英語授業においては「聞く・話す・文法・語彙」の各技能・知識を動員する総合的な活動と考えられる。

4. インタラクションの記述と分析

前節 (3) の「語彙・文・文型の定着に役立つ」という点と、「意味を理解し、そのものの名称を推測する活動」・「英語を英語を通して理解すること」という点に着目する。そこには、話し手が発問し、聞き手がそれについてフィードバックをするという、インタラクションの基本構成が見られ、言語習得の観点からも示唆が得られるのではないかと考えられるからである。

分析に用いるのは、教師がマトリョーシカ³⁾の中に何かを隠し、それを生徒が英語で質問して当てるといった場面である。活動の詳細は付録2.に掲載する。

教師が一方の人形からもう一方の人形へ移し変えるものがジャガイモ

であると生徒は推測し、教師に発問している場面である。

S10: Are you going to put a potato into this doll?

T: Potato? No. No, I'm not going to put a potato into this doll.

同様に、教師はトマトを移し変えるであろうと生徒が推測している場面である。

S11: Are you going to put a tomato into this doll?

T: Tomato? No. OK.

次の場面では、ある生徒は、教師がニンジンを移し変えるであろうと推測した。その生徒が発した“carrot”は他の生徒にとっては未習である、あるいは定着していない単語であると教師は判断し、生徒に“What is 'carrot' in Japanese?”と質問している。生徒は“Ninjin”と日本語で答えている。これによって、発言した生徒だけでなく、その他の生徒も問答を理解することができる。

S6: Are you going to put a carrot?

T: Carrot. What is “carrot” in Japanese?

S6: Ninjin.

T: Ninjin. No. I'm not going to put a carrot into this doll.

同様に、教師はカボチャを移し変えるだろうと生徒が推測した場面である。

S12: Are you going to put a pumpkin?

T: Pumpkin. What is “pumpkin” in Japanese?

S12: Kabocha.

T: Kabocha. No. No, I'm not going to put a pumpkin into this doll.

Ellis (1990: 108-109) の「意味交渉に関連したインタラクションの修正」の分類 (原典は Pica and Doughty: 1985) によると(詳細は付録 1.参照)、これらのインタラクションは“Clarification requests”に相当する。これは、

「話し手（この場合は生徒）の発話について聞き手（この場合は教師）が話し手の発話内容を確認するために質問を返す」という意味交渉 (negotiation of meaning)⁴¹⁾ の一つである。

次の場面では、生徒はキュウリを移し変えると推測し、教師に発問しようとしたが、英語で何と言うのか知らないため、まずは「キュウリを英語で何と言うのか」を質問し、教師の援助を受け、あらためて教師に質問している。

S13: What is "kyuuri"?

T: Kyuuri. "Cucumber". Cucumber.

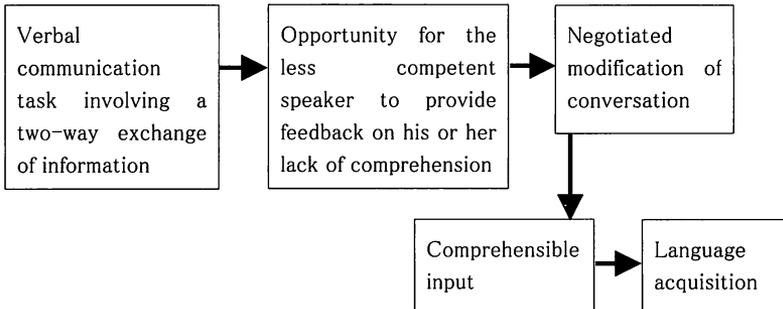
S13: Are you going to put a cucumber in the doll?

T: Into the doll. No. Cucumber. No. No, I'm not going to put a cucumber into this doll. Cucumber, no.

前出の分類表によると、S13の発話は、他者による発話修正の“reacting”という意味交渉を行っている。これは、会話を先に進めるのを手助けする時に、話し手（生徒）の発話の一部を繰り返したりパラフレーズするというものである。この分類表中の定義では「繰り返しかパラフレーズ」となっているが、同じ母語の話し手と聞き手が外国語指導が行われる場合は、一部母語を用いた意味交渉も考えられるのではないか。

5. 考察：インタラクションと第二言語習得のプロセス

会話修正がどのようなプロセスを経て言語習得に至るのかを図示したモデルを以下に掲げる (Ellis, 1990: 原典は Long, 1983)。



[図 1] Model of the relationship between type of conversational adjustments and language acquisition

山岡 (1997) は、このモデルを以下のように説明している:

これは、入力がいかに理解可能となるかを検討し、その重要な決定要因として、母語話者と非母語話者の間で行われる会話を持つ一つの特性を取り上げるものである。この特性はコミュニケーションにおいて理解の欠如が生じたときに典型的に現れるもので、この欠如を埋めるために対話者相互が取り組む会話として具現化される。つまり一方の対話者が理解の欠如を他方に伝え、これを受けて他方がさまざまな方法で自分の発話を調整し、理解の達成を図る。調整は理解が実現されるまで続けられる。

この考えによると、言語習得を促進するのは、理解可能入力そのものというより、むしろ入力を理解可能にするためのこの種の相互作用となる (248-249)。

クラッシュェン (Krashen) の提唱するインプット仮説では、言語の産出は理解可能なインプットを取り入れた後の、言語習得の結果として自然に現れると考えられているので、言語の産出は言語習得に直接的に関与しないことになる。ロング (Long) は意味交渉を通じての、会話として

のインタラクションの重要性を主張しており、その意味において学習者の言語の産出に対しても役割の一端を担わせることになる。

しかし、インタラクションを重視するという考えにも反論がある。「あくまでも理解可能なインプットを得るための前提となるもので、依然としてその役割は言語習得を促進する直接的なものとは見なされない」というものである。この論に即していくと、ゲスワークは言語習得に対する貢献度が低いということになる。この反論に対してどのように反論すればよいだろうか。

ここで、ゲスワーク活動本来の目的に立ち返ってみる。活動の目的にふれた第3節では、「(3) 語彙・文・文型の定着に役立つ」と述べた。この「文・文型の定着に役立つ」という点に目を向けてみたい。この活動で生徒が発する質問はあくまでも one sentence であり、単語のみを並べた発話ではない。ある一定の水準の文法上の正確さを求められるのである。これはスウェイン (Swain) の提唱しているアウトプット仮説 (output hypothesis)⁵⁾に通じる。すなわち、アウトプット仮説においては、「『理解可能なインプット』だけでは文法的正確さを習得するには不十分であるので、聞き手にとって「理解可能なアウトプット」(comprehensible output) が言語能力を発展させるために必要 (窪田: 1994)」なのである。

アウトプットの重要性については土屋 (1988) も「クラッシュェンの仮説は、第二言語が日常的に使用される環境での習得には当てはまるが、外国語の環境ではアウトプットが重要な役割を果たすことは多くの研究者の指摘するところである」と述べている。

また、教室内の発話も教師が主導権を持つことが大部分で、生徒が発話の口火を切る機会が少ない。生徒に質問するための文を自発的に発するように促すことで、この点のある程度解消したことは画期的である。

会話をどのように切り出していくのか、会話が途切れないようにする

にはどうしたらよいか、文法的正確さはどうか、を一通り兼ね備えた活動であると言える。ゲスワークは言語習得の観点からは有効であると言えるのである。

6. 活動の改善点

それでは、この活動を改善するとなると、いかなる点を改善すべきだろうか。インプットの質とアウトプットの質と量という点から述べてみたい。なお、インプットの量に関しては、我々が英語を学ぶのが外国語としての学習環境下にあるということで、これを改善するには英語学習環境を抜本的に変えなくてはならず、それを論ずるのは本論文の主旨から逸れるので、ここでは考えないことにする。

この活動で受けるインプットの質、つまり内容は単一化されている。教師は同じ形式の質問を発している。中学生を対象としている場合は文型に制限が出てくるが、教師は一つの意味を表すものも、言いかえて複数表現を用いて発問すべきであろう。また、生徒の発話内容も単一化されている。本論文で分析対象にした野菜の例で言えば、どのような色をしているのか、大きいのか小さいのか、どこで栽培されているのか、いつ頃の季節に収穫されるのか、どんな味なのか、など、さまざまな発話内容が考えられる。教師はこのような様々な質問内容が考えられ得るということを事前に指導していくと、ゲスワーク活動の意味交渉がさらに深まるのではないだろうか。“What color is it?” や “Is it big or small?” などといった表現であれば、入門期から導入ができるであろう。また、生徒達にとっても、こういった表現を理解のレベルにとどめておくのではなく、自発的に発問できるように授業でのタスクを工夫するとよいであろう。

7. 最後に

本論の主旨からはややはずれるが、最後に一つだけ述べておきたい。この授業者は「英語の授業の中で楽しい場面があるとすれば次のどの場面か」と、自らの指導案に沿った活動内容を列挙したアンケートを作成し、クラス中の割合を集計している。それによると、「ロシア人形等を用いてゲスワークをやる」という項目に「楽しい」と回答した生徒は 40 人中 24 人であった。これは学習意欲を高めるという点で重要である。活動が楽しければ学習意欲が湧き、高い学習意欲が大きな学習効果を生むからである。言語習得の見地からの改善点を元に、さらに学習効果の高まる活動にすることが必要である。そしてこの改善をするのは、教師一人一人の課題である。

注

- 1) 言葉を通してメッセージを伝え合う双方向 (two-way) の言語活動という (白畑他:1999)。
- 2) 数人で行う小規模の英語劇をいう。目標文や語彙が定着し、実際のコミュニケーションの予行演習にもなるので、言語学習としては効果的な活動である (土屋・広野: 2000)。
- 3) ロシアの入れ子式民芸品。
- 4) 我々がコミュニケーションをする時、相互に理解し合うことが困難になった場合、お互いが自分の意志や意味を伝え合うためにさまざまやりとりを行う。この意味理解のためのやりとりをいう (白畑他: 1999)。
- 5) スウェイン (Swain) によって提案された仮説で、「第二言語/外国語習得のためには、学習者が目標言語で話したり、書いたりして、言葉を産出する訓練が不可欠であると主張する (白畑他: 1999)」もの。

付記

本論文は、1999年度に文教大学大学院言語文化研究科において開講された「第二言語習得研究Ⅱ」の提出課題である「ゲスワークをインタラクションの観点から分析・批評する」の内容を加筆・修正したものである。

参考文献

- Ellis, R. (1990) *Instructed Second Language Acquisition*. Blackwell.
- 窪田三喜夫 (1994) 第10章 クラスルーム・リサーチと第二言語習得
小池生夫監修 SLA研究会編 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』 大修館書店:179-198
- Long, M. (1983) Native speaker/non-native speaker conversation in the second language classroom. In Clarke, M. and Handscombe, J. (eds), *On TESOL '82: Pacific Perspectives on Language Learning and Teaching*, TESOL.
- 長勝彦(編著) (1997) 『英語教師の知恵袋 上巻』 開隆堂出版
- Pica, T and Doughty, C. (1985) The role of group work in classroom second language acquisition, *Studies in Second Language Acquisition*, 7:233-49.
- 白畑和彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (1999) 『英語教育用語辞典』 大修館書店
- 土屋澄男 (1988) 「言語習得における OUTPUT の役割」『言語と文化』 第1号 90-102 文教大学言語文化研究所
- 土屋澄男・広野威志 (2000) 『新英語科教育法入門』 研究社出版
- 山岡俊比古 (1997) 『第二言語習得研究』 桐原ユニ

謝辞

本論文のテーマは、文教大学の土屋澄男先生の示唆によって着想したものです。また、論文作成においても、土屋先生に貴重なアドバイスをいただきました。ここに、深甚なる謝意を表します。

付録 1. 意味交渉に関連したインタラクションの修正の分類

1. Clarification requests

Definition: any expression that elicits clarification of the preceding utterance.

Example:

A: She is on welfare.

B: What do you mean by welfare?

2. Confirmation checks

Definition: any expression immediately following the previous speaker's utterance intended to confirm that the utterance was understood or heard correctly.

Example:

A: Mexican food have a lot of ulcers?

B: Mexicans have a lot of ulcers? Because of the food?

3. Comprehension checks

Definition: any expression designed to establish whether the speaker's own preceding utterance has been understood by the addressee.

Example:

A: There was no one there Do you know what I mean?

4. Self-repetitions :

(1) repairing

Definition: the speaker repeats/paraphrases some part of her own utterance in order to help the addressee overcome a communication problem.

Example :

A : Maybe there would be-

B : Two?

A : Yes, because one *mother* goes to work and the other *mother* stays home.

(2) preventive

Definition: the speaker repeats/paraphrases some part of her own utterance in order to prevent the addressee experiencing a communication problem.

Example :

A : Do you share his feelings? Does anyone agree with Gustavo?

(3) reacting

Definition: the speaker repeats/paraphrases some part of one of her previous utterances to help establish or develop the topic of conversation.

Example :

A : I think she has *a lot of* money.

B : But we don't know that?

A : But her husband is very rich.

5. Other-repetitions :

(1) repairing

Definition: the speaker repeats/paraphrases some part of the other speakers utterance in order to help overcome a communication problem.

Example :

A: I think the *fourth family*.

B: Not the *fourth family*, the third family.

(2) reacting

Definition: the speaker repeats/paraphrases some part of the other speaker's utterance in order to help establish or develop the topic of conversation.

Example :

A: I think she *has three children*.

B: This is the thing. *She has three children*.

付録 2. ゲスワークのトランスクリプト

1. T は教師を、S は生徒を表している。

2. [?] は聞き取れなかった部分であることを表している。

T: Well, look at me. Now, I have a doll in my hand. I have another doll in this doll. I have nothing in this doll. I have something in this doll. Now, I'm going to take it from this and I'm going to put it in this doll. Guess. What am I going to put into this doll? Anyone? S1?
S1: Are you going to put a coin into the doll?

T: Coin? Yes, I am. I'm going to put a coin into this doll. OK, S2?

S2: Are you going to put a German coin into the doll?

T: A German coin? No. S3?

S3: Are you going to put an American coin into the doll?

T: American coin? No. I'm not going to put an American coin into this doll. So, anyone?

S4: Are you going to put a Spanish coin into the doll?

T: Spanish coin? That's right. I'm going to put a Spanish coin. Now, I have a Spanish coin in this doll. OK. I'm going to put into this---- Spanish coin. You are right. Well, this is for you (T gives the coin to S4). You are welcome. Ok. [?] Well, now, I have two dolls in my hand. Well, this is larger than this one. This is smaller than this one. Now, now, I have nothing into this doll. I have something in this doll. Well, I'm going to take it out of this doll and put it into this doll. What am I going to put into this doll? Anyone? S5?

S5: [?]

T: Vegetables. Yes, What kind of vegetables?

S6: Are you going to put a carrot?

T: Carrot. What is "carrot" in Japanese?

S6: Ninjin.

T: Ninjin. No. I'm not going to put a carrot into this doll. OK. S7?

S7: Are you going to put a "piman" into the doll?

T: Green pepper? No. I'm not going to put a green pepper into this doll. OK? S8?

S8: [?]?

- T: Daikon. In English "radish". Radish. OK?
- S8: Are you going to put a radish into this doll?
- T: No. No, I'm not going to put a radish into this doll. OK. S9?
- S9: Are you going to put an orange into this doll?
- T: No. OK. S10?
- S10: Are you going to put a potato into this doll?
- T: Potato? No. No, I'm not going to put a potato into this doll. OK.
S11?
- S11: Are you going to put a tomato into this doll?
- T: Tomato? No. OK. S12?
- S12: Are you going to put a pumpkin?
- T: Pumpkin. What is "pumpkin" in Japanese?
- S12: Kabocha.
- T: Kabocha. No. No, I'm not going to put a pumpkin into this doll.
S13?
- S13: What is "kyuuri"?
- T: Kyuuri. "Cucumber". Cucumber.
- S13: Are you going to put a cucumber in the doll?
- T: into the doll. No. Cucumber. No. No, I'm not going to put a
cucumber into this doll. Cucumber, no. S14?
- S14: What is "nasu" ?
- T: "Nasu" is, uh, "eggplant". Eggplant.
- S14: Are you going to put an eggplant into the doll?
- T: Yes. Well, now, well, look at me. Now I'm going to put an eggplant
into this doll. Congratulations.